

脚本家

小山内美江子さん



カンボジアは、タイ、ラオス、ベトナムと国境を接している国で、アンコールワットの遺跡が有名です。日本からも遺跡を見るために多くの観光客が訪れています。1953年の独立後、1975年にポル・ポト派が政権を握り、農業集団化政策を行いました。これが失敗に終わり、内戦化し、ポル・ポト派により、約180万人の大量虐殺が行われたと言われています。知識階級の人々から殺戮していったため、教師の多く（約8割と言われています）もその対象となっていました。そのカンボジアのために、JHP・学校をつくる会は、寄付金を集め、今までに276の小中学校を建て、教育を根付かせてきました。その代表である小山内美江子さんにお話を伺いました。（取材日：平成23年11月21日）

カンボジアに学校をつくる 日本の若者のためにもなると信じて



PROFILE

【おさない みえこ】1930年横浜生まれ。神奈川県鶴見高等学校卒。1951年東京スクリプター協会会員として映画制作に参加。1962年NHKテレビ指定席「残りの幸福」でシナリオライターとしてデビュー。1990年の母親の死と中東の湾岸危機を契機に、国境を越えたボランティア活動という新たな人生へ踏み出した。執筆の傍ら、「JHP・学校をつくる会」代表を務める。2003年には文化庁より文化交流使を任命される。日本シナリオ作家協会会員。NHK厚生文化事業団理事。国際ボランティア・カレッジ塾長。東京未来大学客員教授。シナリオライターとしての代表作には、TBS「3年B組金八先生」「加奈子」「父母の誤算シリーズ」、NHK「翔ぶが如く」「徳川家康」「マザーちゃん」「主夫物語」がある。主な著作は、「ヨルダン難民救援への旅」(岩波ジュニア新書)【1992年文芸大賞受賞】、「3年B組金八先生」シリーズ(24冊)(高文研)、「カンボジアから大震災神戸へ」(旬報社)、「メコンに輝く桜小学校」(佼成出版社)、「できることからはじめよう」(講談社)、「『ボス』と慕われた教師」(岩波書店)、「『赤い靴』の女たち」(集英社be文庫)、「25年目の卒業 さようなら私の金八先生」(講談社) 他多数

——今日は多忙の折り、お時間を作ってください、ありがとうございます。どうぞ、よろしく願います。年齢を感じさせない若々しさに驚きます。

いいえ、最近の写真では、猫背に見えろと言われます。亡くなった私の母は、ものすごく姿勢の良い人でした。時々、そっくり返って、威張って歩いているのではないかと言われるほどでしたが、私の場合、机に向かい脚本を書いています

と、どうしても猫背になります。だから、気が付いたときには、慌てて背中をピシッとやっています。

——小山内さんが中心となり、カンボジアで学校をつくっていらっしゃる話もさることながら、そこに至るまでの経緯や、我々が知らない脚本家という世界につきましても、今日お話を伺いたいと思います。1962年に脚本家におなりになり、50歳代の読者が懐かしそう『ザ・ガードマン』や『キイハンター』なども担当されたと伺っています。

脚本家として、コンスタントに書けるようになったのは1963年の終わりです。1962年はちょっと書いたというだけで、この頃、少しずつ映画産業が傾いてくる時代で、助監督のチーフをしていたものすごく優秀な人から、脚本を書くことを誘われました。「これからは現場だけではなく、書いていく時代になるだろうから、あなたも書かないか」と言われ、「分かりました。よろしく願います」となりました。

私は元々スクリプター(映画の撮影現

場において、撮影シーンの様子や内容を記録・管理する係)を9年やっていましたから、門前の小僧は習わぬ経を書けてしまうわけです。フジテレビで何本かやりました。最初は、諜報(スパイ)もののようなものを書きました。実際は、事件もののようなものは2人とか3人で書くのです。

——分担するというのですか。

そうです、分担です。ところが、相棒が間に合わない、二番手の人のを使うということがよくありました。なぜ脚本家になったのかと言うと、少し体調を崩して家にいた時、子どもを身ごもったこともあり、それを機に家で出来る仕事を考えました。子どもをおんぶして、ロケーションに行きませんから。そして子どもが生まれて、なぜかバツイチになり、子どもを連れて実家に帰ってきました。初めの頃、山村聡さんから「今までの中で、こんな言いやすいせりふを書いてくれたのは、あなただけだ」と、言ってもらいました。嬉しかったですね。普通の会話だったのですが、どんどん書けたのです。

——われわれ素人が見ますと、やはり、脚本家というのは、現場の立ち会いなど、実際は外出をしなければいけないようなことも多かったのではないのでしょうか？
ある程度は家でできるわけですか？

基本的に家でできる仕事なので取材は徹底的に歩きますが、あとは執筆です。子どもがいたから、コツコツやらざるを得

JHP・学校をつくる会の目的

(JHPのリーフレットより)

お金のある人はお金を！
知恵のある人は知恵を！
行動力のある人は一緒に汗を！

1 国際時代におけるボランティア活動

カンボジアに学校をつくるためにこの会は生まれました。学校とプレイグラウンドをつくります。そして地球上の戦争や自然災害で、教育が受けられないあらゆる国々の子供達のために、必要に応じた様々な活動をしします。

2 学校建設の資金の確保

カンボジアでは小学校1棟(5～6教室)は、400～600万円で建設できます。当会は40年は使用できる校舎の建設を目指して、資金を集め、新たな技術と材料を投入し、毎年数十校の新築、修理を行います。

3 自分たちの手で現地へ入る

物やお金を集めて送る援助だけでは何がどう使われたかわかりません。また援助物資が本当に必要なものかどうかは、現地に行かなければわかりません。私たちは駐在員を送り、ローカルスタッフと共に現地の人々と直接交わり合い、助けあい学びあうという実践をしています。

◎JHPの連絡先

e-mail:Tokyo-office@ihp.or.jp

http://www.ihp.or.jp

◎寄付の受けつけ

JHPでは会費・会員制を実施しています。

「認定NPO法人」に認定されているため、寄付は税法上、所得控除の対象となります。ホームページをご参照ください。

JHP・学校をつくる会

検索

まずはクリック

- ・小山内さんの活動に興味のある方
- ・寄付を検討して下さる方

なかったし、すると次々と仕事に来て、文芸物には縁が遠かったけれどすぐくうれしかったです。

そんな感じでコツコツやっていたらNHKから朝のテレビ小説『おていちゃん』(沢村貞子・原作)のお話が来たのです。半年のものを全力投球で書ける、ある意味登竜門です。

でもその時、子どもが高校受験にかかっていたので涙をのんでお断りしたら、そのあとの『マー姉ちゃん』(熊谷真美・主演)を執筆することになりました。その次が『3年B組金八先生』です。

できるところだけをやりましょう

——その『3年B組金八先生』で、ブレイクされます。『金八先生』も含めて、外から受けている印象ですと、すぐ仕事一途な方というように見えるのですが、実際は仕事もし、家で必要なこともし、結構いろいろなことを?

家で必要なことつまり家事などはやりません。やっていたら脚本が間に合いませんもの。

——そうしますと当時は、今回の話の中のボランティアなどは、まったく興味なく、触れることもなく、やはり仕事一途でしたか?

興味はありました。母は、そういう人でしたから。しかし、仕事がつつとありましたので、ボランティアはできませんでした。熱海にいた時、そこのお母さんたちは、感動するほど働き者でした。熱海のホテルでも、土日になるとバートとお客さまが来ます。そのときに、台所で洗い物や何かで働

きに行くお母さんたち。昼間はワカメを干したり、アジの干物をひっくり返したり、すごい働き者なのです。その中の1人が、うちにバートで来てくれ、家事を助けてくれました。

熱海はお年寄りのメッカで特養などもあります。だから自分の家の仕事をして、子どもの面倒を見て、その合間に、老人ホームなどへ行っておむつをたたんでくるのです。私はそれを聞いていて、女性として、やはりすごいことだと思っています。

「私はやる気はあるのだけれど、その時間がなくて本当にごめんなさい」と言ったら、「いいです、小山内さんが来て、腰が痛くなったと言われるよりは、お金でもらったほうがいい」と、ズバツと言います。それならお金をと、いくら何でも活動費の足しになればというかたちでした。思っただけでもできない、だから、「できることだけをやりましょう」となりました。

——JHP・学校をつくる会の、「お金がある人はお金」につながっていくということなのでしょうか。

そうです。

——では、3つ目の「行動力のある人となり、汗をかかれるきっかけ」は、いつ頃から始まりますか

もう誰かのために 働かなくてもいい



当時、大きな仕事としては、大河ドラマ『翔ぶが如く』で、(1990年)8月10日くらいに終わる予定で書いていました。8月2日に、イラクのフセインがクウェートに武力侵攻しました。また、『翔ぶが如く』が終わる前に母が亡くなりました。バツイチで出戻って来て以来、ズーッと一緒に暮らしていましたから、悲しいけれど、残念ながらホッとしたこともあります。これからのように生きていこうと考えました。私、60歳でした。

子どもは独立していましたが、もう誰かのために働かなくてもいいわけです。自分が食べていければいいわけです。その矢先の湾岸危機です。アメリカは力があ

りましたから、いろいろな国の軍隊がどんどん参加して、アピール一つでサウジアラビアに布陣し多国籍軍ができます。その中で、日本は参加できません。日本には自衛隊があっても軍隊はないのと、二度と戦争はしませんという憲法があるからです。だからお金を出しました。すると、日本は金だけ出して血も汗も流さない。笑っていて、何を考えているか分からない日本人と言うバッシングです。

——確かにそのように言われた時期がありますね。

その頃、『翔ぶが如く』が終わってようやく私は時間的余裕が出来ました。大きな仕事をした後は、すぐには仕事を取らないのです。生意気を言えば、充電期間が欲しいです。お金の余裕がある、時間の余裕もある。今なら何かできると思っていたところで、どうしていい分かりません。そのときに、新聞に小さく、日本の大學生が数人、ヨルダンまで行って無事に帰ってきたという記事がありました。その記事を書いた人に「会いたい」と、逆取材をして、そうしたらいろいろと教えてもらい、それでケン・ジョセフという名前に辿りつきました。

ケンはアガペハウスというボランティア団体を主宰しているアメリカの青年で、すぐにケンに会いました。ケンはすべて手配してくれると言いましたが、そんなに簡単に中東へ行けるとは思っても

ませんでした。

——そして、実際に、ヨルダンに行かれたのですか？

そうです。

——ヨルダンでの難民救済は、具体的にどのような動きを？

イラクから命からがら逃げてきている、油を扱っていた労働者たちが、まず国境を越えるのですが、そこから首都アンマンに至るまでいくつかのキャンプがあり、最後がアンマン、帰国の飛行機待ちです。その人々に毛布を貸し出したりするのが活動内容でした。

——ヨルダン(アンマン)に行かれたのは、国際協力活動としての実際の始まりということになるのでしょうか？

始まりはそうです。「顔も見えない日本人が、御不満のようですが、こんな顔で良かつたら見てください」と、日本人の顔とハートを見せに行こうと、そういう思いの方が強かったです。

——国際協力活動というよりも、むしろ、海外という場所で、日本人の顔を見せるということですか？

はい、戦争は絶対にいけないという日本人の顔を見てもらうのです。

——その約十年後、カンボジアに、初めて訪問されるという流れになっていくのかと思いますけれども。

時は遡りますが、1979年に『3年B組金八先生』が始まります。息子の中



一度カンボジアに行った人は、子どもたちのこの目に魅せられてしまう
©竹内 敦

学3年間を、そのお友達の3年間も見ていたら、これなら書けると思いました。人生で初めて選別される高校受験というもので、つぶされていく子どもたちの気持ちがかつたのです。口惜しかったり情けなかったという話はたくさん聞いてやっていたから「中学生もので良かったら、やりますよ」と言ったら、「やってくれ」と言われました。テレビ局の人たちも、どのようなものになるのか、まったく見当がつかなかったでしょうね。

『3年B組金八先生』を書きはじめた1979年にボル・ポトが今の政権に追われて、タイへ逃げます。人々は大混乱・悲劇が生まれて、私は思いの丈を脚本として書きました。「この川が、ずっと流れて行った先がカンボジアだ」と書きました。中学生は、世界の同じ年頃の子に対する関心がないというか、知識が全くない、誰も教えない。だから、大切な棒を使ってもやってみたということでした。だからこそ、今すぐには行けないけれど、必ず行こうと思いつけていました。しかし、実際にカンボジアに行つて活動をするまではヨルダンから十年という長い時間が流れました。

カンボジアでは長い間、内戦が続く、1993年に選挙をやるために、1992年中に、難民を全部帰そうという計画をたて、帰ってくる難民のお世話をしに行こうとなりました。先年のイランに続き

日本の若者、大学生と一緒に行動したのです。レベルは、片言の英語ができれば、技術はいらないのです。「何が何でもカンボジア」と、無理なく行けたのです。難民は、国境から列車で帰ってきてプノンペンに着いても、プラットホームもなく、子どもやお年寄りには降りられないのです。オレンジの揃いのTシャツを着て、降ろす作業に専念です。そして、一時収容センターに連れていくのです。そういうところから始めたのが良かったと思います。英語に自信のあるものは登録の手伝い、子どもの好きな子は子どもと遊び、キッチンが間に合わないから、やってくれる人はそちらに行き、私は老眼鏡で大根みたいなのを切っていました。

——そのとき一緒に行かれたのは、主に大学生ですか？

高校生は大学入試があるから無理です。大学生は、夏休みや春休みに組めば、行こうと思えば行けるわけです。それが今もずっと続いています。社会人枠もあり、一緒に行きます。

——最初の頃は、小山内さんが声を掛けて、人が集まったのですか？

第1回目は、亜細亜大学生が多かったです。元学長を存じ上げていたので、1991年にはイランへ、1992年には、カンボジアに入国したのです。

——まだカンボジア国内も荒れていました、中田厚仁さん（UNHCR…国連

難民高等弁務官事務所）が選挙支援活動ボランティア中に、狙撃され死亡したのもそのころですか、もう少し後ですかね。その少し後です。JHPが大学生を大勢連れて来ていることを知り、会いに来ました。

——実際、そこで。

私たちは治安上プノンペンの中だけで、外へ出られなかったけれど、彼は、国連機関のボランティアですから、とても不便な所で活動していたのです。

——そうですね。中田さんの直後にもPKOで、岡山県警の警察官が亡くなっています（文民警察に従事した高田晴行警視が武装集団に襲われ死亡）。実際、いろいろな意味で犠牲は生じたのですが、あのころから、日本人の顔が少しずつ見えるような状態になってきたのではないかと、思っています。その難民救済から転じて、「学校をつくろう」となったのは、なぜですか？

最初は、帰還難民のことについていっばいでした。しばらくしますと、日本ならば、ランドセルを背負って学校へ行く時間に、そんな子どもはいないことに気づきました。それで聞いてみますと、学校はつぶされてしまい、先生は殺されていました。教育は全面ストップという状態でしたので何が何でも、これからこの国が自立していくためには教育だと思いましたので、学校をつくろうということになったわけです。



子どもたちも作業を手伝う



コンクリートを皆でこねる

——子どもの姿が見られないというのは、歩いている子どもたちも？

いますが、学校に行っている時間帯に親と一緒に働いたり、家族を失って街をウロウロしているのです。

——それが、「カンボジアの子どもに学校をつくる会」につながるわけですね。

そうです。後に、他の団体等を見習って名称を「JHP・学校をつくる会」としました。海外では、アルファベットで略して言うケースが多いからです。

——活動の担い手である大学生は、「JHP・学校をつくる会」となつてからはどのようなことをしているのですか。

プランコなどの遊具は、一緒に行った学生のボランティアによって、作製されます。くぎ抜きを使う時に驚かされたこと

がありました。てこの原理を使うことなく、力任せに引つ張る学生がいるのです。小学校ですでに、てこの原理は学んでいるはずですが、その勉強と実地が結びついていないのです。勉強してきたことが、現場で役に立つということを体感する良い経験にもなるのです。

また、実際に学校をつくると、子どもや親や教育者が喜びます。でも日本のためにもなくなってしまうのだと思つたから、現地へ一緒に行くわけで、先ずカルチャーショックに出会って、乗り越えてひと月いますと、たくましく変わりますよ。その変わるところを見られるのが、無上の喜びですね。

また、未知の国でのボランティアに不安な気持ちを抱く学生には、「頭でっかちに色々なことばかり考えていないで、思うことがあれば飛び込んでみなさい」と事務局メンバーなどは言っています。

——そのことにも関連しますが、60歳で定年退職になった時点で、「さあ、何をやるうか」と考える定年退職者が非常に多いです。初めてのことは、残念ながら、

迷つたときは、
まず一步前へ出てみな。
景色が変わるよ

歳が上れば上がるほど、最初の一步は出にくくなり、おっくうになります。ボランティアに少し関心があつてやってみようかなという方々に対して、特に最初の一步がうまく出るように、今までのご経験を通じて、何かアドバイスをちょうだいできればと思います。

あまり考えすぎないことです。思つたら、まず動く。『金八先生』のせりふの中で、「迷つたときは、まず一步前へ出てみな。そうすると景色が変わるよ」というのがあります。一步出ると視界に入ってくるものが違ってくるわけです。私自身、大変だなと思つたときに、「そうだ、



ノートを配布するボランティア

守りに入らないで、 好奇心をいつまでも 持つこと



自分が書いたせりふだから、一歩前に出てみよう」と思ったことがあります。

要するに、守りに入らないで、好奇心をいつまでも持つこと。それは、やはり若さの秘訣ですよ。好奇心があるからのぞいてみる。そこでやってみようと思ってもいいし、でも、うさんくさい、どうも自分に合わないと思ったらやることはない。変にそこで義理を果たすことはないわけですから。まず、出ることですよ。

——「まず出てみる」そのような感覚で、十分なのですね。

十分です。何も、必ずしも、スコップを持って一緒に働くこともないです。本当に亡くなってしまうって残念ですけど、俳優の牟田悌三さん。あの方は、いのちの電話というのをやっていました。小さなオフィスで、いのちの電話は何時から何時までと決まっていますから、お子さん

を育て終えた奥さんも参加されて、『助けて』という電話があつても、一切説教をしてはいけません。とにかく悩みをひたすら聞いてやってください」という活動です。それだけでいいのです。それもボランティアです。要するに、好奇心を持って、キヨロキヨロと見たらいいと思います。

——「好奇心」ですね。

その活動が自分に合うか合わないかわからないです。すぐに分かんなくても、キヨロキヨロと見ていたら、向こうから子どもが走ってきてにつこり笑ったら手を出し、その子どもも手を握れば、これで一つ進むわけです。気取る必要はないのです。気取る人もいますよ。その人とは自分は違うからと思えば、それで良いことです。ですからね。

——最後に、本誌の読者は主に地方公務員です。特に地方行政や、行政全般に対して、誌面を通じて、もし何か訴えたいことがあれば、おっしゃっていただけますでしょうか。

1980年頃カンボジアに駆けつけた若者は、ご飯さえ食べられれば、あとはお小遣い程度でいいのですが、結婚して、子どもも産まれたら、ノーギャラは通らないですよ。後ろ髪を引かれる思いで日本へ帰ってきて、また新しい若者が仲間になる。そして、その若者も恋をして結婚して…。となると、日本のボランティアは、全く育たないのです。

私も含めて、JHPでは理事の人々はみな無給です。しかし、事務局で働き、これから担う人には、まともにお給料を払わないとだめだと思い、苦しいけれど払っています。要するに、NGOの、特に正規雇用職員に対して、それなりの待遇改善というものを、やはり国や自治体としてももう少し考えてもらいたいというのが要望です。ヨルダンでもイラク、イラン、アフガンでも国が動けなくてもNGOが動きます。

南三陸町にもボランティアは泊まりがけですが、担当者の清国は年内いっぱい東京に戻します。彼は、海外事業部長ですから、(2012年)3月に学生を連れていくときに、彼が不可欠です。どちらも大事ですから、彼が南三陸でやっていた仕事を、向こうの人に教え込んでいます。社会福祉協議会も、最初は何をやっているかわからないし、お金も来なかったようですが、今は回ってきているようです。良かつたし、是非、次の人を育てるようにNGOを使ってもらいたいと思います。また、公務員の中でも的確にボランティアのコーディネートができるような人々を育てられるように願ってやみません。

——本日は色々ためになるお話をお聞かせくださり、ありがとうございました。

(インタビュアー…協会職員)

竹内敦・河本敦彦